

一般演題 スポーツ外傷 OP3-5 スポーツ専用高気圧酸素治療の現状と有害事象 への対応

○梅木秀一^{1,2)} 山口信彦^{1,3)} 平畑佑輔^{1,2)}
増田裕也^{1,2)} 安井洋一^{1,2)} 笹原 潤^{1,2)}
宮本 亘^{1,2)} 中川 匠^{1,2)}

- | |
|---------------------|
| 1) 帝京大学スポーツ医科学クリニック |
| 2) 帝京大学スポーツ医科学センター |
| 3) 医療法人徳洲会 山内病院 |

2018年8月、帝京大学スポーツ医科学センター棟内に高気圧酸素治療装置を保有する帝京大学スポーツ医科学クリニックを開院した。当院の装置はパロテックハニュウダ社製で、最大定員8名の第2種装置である。当施設はスポーツ傷害診療に特化しており、各種スポーツ傷害に対して高気圧酸素治療を行っている。

2018年11月から2024年2月末までの総治療回数は4,987回で、平均年齢は23歳であった。年々治療件数は増えており、2023年度の1か月平均の治療回数は122回となっている。疾患別にみると、捻挫・靭帯損傷が1,466回(29%)と最も治療回数が多く、肉ばなれ1,384回(28%)、疲労回復492回(10%)、骨折・骨挫傷489回(10%)、打撲・筋挫傷453回(9%)の順に治療回数が多かった。また、スポーツ別の治療回数は、ラグビーが2,564回(51%)と最も多く、次いでサッカー875回(18%)、陸上545回(11%)の順であった。2023年度においては、サッカーとラグビーはほぼ同数の治療回数であった。

有害事象が発生した症例は28例(0.6%)あり、気圧外傷27例(中耳気圧外傷20例、副鼻腔気圧外傷7例)、気分不快1例であった。そのうち逆スクイズの1例についても紹介する。